

はじめに

私は東京西郊の武蔵野市で、総勢9人の小さな絵画修復工房を主宰しています(図1、2)。

仕事の対象としているのは、時代的に分類すれば、多くは近現代の作品です。作品の内容はといいますと、日本人作家・海外の作家を問わず油彩画と版画・素描、そして複合的な材料で制作されている現代絵画です。

仕事を依頼してくださるのは主として美術館で、美術館に出かけて仕事をする事も少なくありません。個人の蒐集家や画廊からの仕事の依頼もあります。国宝や重要文化財からは遠い小さな仕事や相談も大切にしています。

そのような私に「西洋絵画」の保存と修復の仕事に携わる人々全体を見渡してその現状を分析する力や広い視野が備わっているとは思えませんが、40年の経験のなかでかわりのあった人々や「修復」を取り巻く状況の変化を透視して「文化財をまもる人たち」についてお話ししたいと思います。ここでは「西洋絵画」のなかの「油彩画」の保存修復を主題とします。

日本に導入された油彩画

「油彩画」は江戸末期から明治にかけて日本の近代化とともに日本文化のなかに新たに登場した絵画の一分野です。日本の修復家の私が「明治時代の古い油絵を修復している」と話すとヨーロッパの同業者に怪訝な顔をされます。油彩画の歴史の長いヨーロッパの修復家からみれば、明治時代の作品は19世紀末から20世紀初頭に属するからです。



図1 絵画修復工房の日常(口絵カラー参照)



図2 山領絵画修復工房の月例会



図3 『慶応二年開成所學図局画学生高橋由一ら「油絵を揮写するの図」(「画伯高橋由一翁傳(三)」『日本』明治25年7月25日、青木茂編『明治洋画史料 懷想篇』中央公論美術出版、1985年、13頁、復刻収載)

江戸末期に、西欧の絵画を目にするまで日本画を描いていた画家がどのようにして油絵の技法を獲得したか、また油絵の画家を志した明治初期の若者が当時どのような教育をうけたのかを知るのには、絵肌直接接触して修復をする私たちにとって作品の組成を知るうえで興味深い問題です。

油絵が日本に導入された幕末以来の道筋をたどると、二筋の流れをみることができます。一つの流れには蘭学との接触によって西洋美術を知った司馬江漢や亜欧堂田善などの江戸の洋画家たちがいます。この流れの中で最後の洋風画家であり最初の近代洋画家といわれる高橋由一(1828~94)(図3)が大きな存在です。由一は遠近法や明暗法による西洋画の逼真的な写実表現に驚き、油絵具による材質表現のリアルさに惹かれて、西洋画の材料・技法を貪欲に追求して誰もが知る『花魁図』(図4)や『鮭図』などの作品を残しました。また、後進の育成にも大きな業績を残しています。明治初期には由一の画塾天絵楼をはじめ川上冬崖の聴香読画館、五姓田芳柳の私塾などが洋画の指導的な役割をはたしていました。洋画の材料の入手も不自由な時代であったために、材料技法に関してこれらの画家たちは強い関心をもっていました。実際に修復に際して絵具層の溶剤に対する反応を調べると、

図4 高橋由一『花魁図』(1875年頃)(東京藝術大学蔵)(口絵カラー参照)



のちに「旧派」と呼ばれる明治期の画家たちの絵肌が堅牢であるのを私たち修復家は経験として知っています。

明治9年(1876)に、明治政府は殖産興業政策の一環として工部省管轄下に工部美術学校を開き、教師としてフォンタネージ (Antonio Fontanesi) らを招きました(図5)。フォンタネージについて、画家の木村荘八は、後年、自分のうけた教育と比較してフォンタネージが、「いかに手堅い、油絵の下塗りから上描きへかけての伝統的技法に忠実であったか」と述べ、その画風を「バルビゾン派に呼応する」^(註1)画風であったと評しています。しかしフォンタネージはわずか2年で病気のため帰国してしまい、後任として招聘された教師に対する不満から学生が一斉退学をした事件などもあって工部美術学校は明治16年(1883)、閉鎖、廃校となります。かわってそのころから美術行政に影響力を強めていたフェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa) や岡倉天心らの伝統美術復興の影響を受けて油絵は西洋画として排斥され、明治20年(1887)に勅令で文部省直轄学校のなかに東京美術学校が設置されたときもその内容は日本画科、彫刻科、図案科だけで、油画は設置されていませんでした。

注1

木村荘八(1893~1958)「明治初年の外人画家(二)」『古東多万』2巻3号(青木茂編『明治洋画史料 懐想篇』中央公論美術出版より引用)



図5 アンтониオ・フォンタネージ『牧牛図』(1867年)(東京藝術大学蔵)(口絵カラー参照)

8年後の明治28年(1895)にフランス留学を終えて黒田清輝が帰朝しました(図6)。彼が持ち帰ったのが「外光派」と呼ばれた新傾向の絵画です。この流派は明るい感覚的表現で外光のなかの人物や風景を描き、次世代の画家たちを惹きつけました。明治初年の画家たちから工部美術学校へと受け継がれていた制作技法は前世代の「旧派」とされ、褐色がかった作品の外観から「ヤニ派」と呼ばれるようになります。そして東京美術学校のなかに、黒田の帰朝を待っていたかのように明治29年(1896)に西洋画科が設置されました。当時の教授陣は、黒田清輝・藤島武二・和田英作・岡田三郎助・久米桂一郎で、以後の日本の美術界を牽引する画家たちです。

当時、油絵具はすでにチューブで売られ、地塗りされたキャンパスも市販されていました。明治初期の画家たちのような画材を手に入れる苦労や、高橋由一のように、わずかな手がかりで材料や道具を自分でつくる工夫と苦労の時代はもう遠くなくなっていました。

日本の油彩画

明治31年(1898)に「旧派」の浅井忠が指導する油絵教室が東京美術学校



図6 黒田清輝『湖畔』(1897年)
(東京文化財研究所・黒田記念館蔵)